

ともだちになりたいな

ウラジスラフ・クラピーヴィン 作
清水陽子 訳



ともだちになりたいな

ウラジスラフ・クラピーヴィン 作

清水陽子 訳



童心社

＜訳 者＞

清水陽子（しみずようこ）

1941年生まれ。早稲田大学文学部を卒業後、日ソ学院でロシア語を学ぶ。現在、かわさきおやこ劇場の運営に携わる一方、ソビエトの児童文学を読む会や同人「イワン」の仲間と翻訳を勉強中。ソビエト児童文学の翻訳に『おとなになんか負けないぞ』（共訳）、『ぼくのともだちミーシカ』（共訳・以上童心社）がある。

現住所 神奈川県川崎市中原区刈宿38

ともだちになりたいな

1983年 5月25日 第1刷発行©

著 者 B. クラビーヴィン

訳 者 清 水 陽 子

発行所 株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 03(357)4181（代表）

振替 東京1-75504

印 刷 新興印刷製本株式会社

平 版 小宮山印刷株式会社

製 本 株式会社難波製本

NDC983/©1983/136p/21.6×17.6cm

Printed in Japan

日本の小さな読者のみなさまに

地球上^{ちきゅうじょう}に住む子どもたちは、いろいろなことばで話したり、読んだりしています。そして、さまざまな国に住んでいます。それでも、やはり子どもたちには、多くの共通点^{きょうつうてん}があります。みんな、遊ぶこと、楽しいことが好きで、笑ったり、じょうだんをいい合っています。そして、ほんとうの友情^{ゆうじょう}をたいせつにしています。

わたしは、決して子どものころをわすれはしません。だからこそ、こうして、子どもの本を書いているのでしょう。わたしは、子どもたちとの友情をととても大きな喜び^{よろこ}と考えています。

わたしは、長い間、ピオネールという少年団^{*1}の指導^{だん しどう}をしています。ピオネールでは、いろいろのことをします。たとえば、お話を書いたり、新聞^{しんぶん}の記事を書きます。そして、フェンシング^{れんしゆう}の練習をしたり、映画^{えいが}をとったりします。ヨットをつくり、そのヨットでウラルの湖^{みづうみ}をのりまわしたりします。

いままでに、多くの子どもたちが大きくなり、なんんかが船乗り^{ふねの}になりました。その中に、船の無線技師^{むせんぎし}になった女の子^{かのじよ}がいます。彼女はもうなん回も日本を訪れており、いろいろ話してくれます。ある日本の小学生に、「ソビエトでは、どんな生活をしているの」と、聞かれたこと。そしてあるときは、「世界中^{りよこう}を旅行したいな。たくさん、本を読みたいな。そうすれば、世界中の人たちがどんな生活をしているのかかわかるのに……。」と、話されたこと。

だれもが、世界旅行に行けるわけではありません。でも、旅行と同じように、本でも、新しいともだちができます。

わたしの、このお話があなたに、すこしでも人生について、遊びについて、そして、ソビエトの子どもたちを知るお手伝い^{きいけ}ができれば幸いです。また、すこしでも楽しんでくださったり、笑^{わら}ってくださったら、とてもうれしく思います。

装釘
||
E・スチエル
||
辻村益朗
||
ゴッパヤ

もくじ

日本の小さな読者のみなさまへ――
1

ともだちになりたいな――
7

訳注――
132

訳者あとがき――
134

ВЛАДИСЛАВ КРАПИВИН
МУШКЕТЁР И ФЕЯ
ИЗДАТЕЛЬСТВО «ДЕТСКАЯ ЛИТЕРАТУРА», 1979.

ともだちになりたいな

「ジョニー！　どうやら、わたしは、おまえのしつけ方をまちがえていたようだ。」

とうさんは、いらいらして指を鳴らしながらいった。

三年生のジョニー・バラビヨフは、肘^{ひじ}かけいすにのって、両ひざをたてて本を読んでいる。かなり読み古してくれたびれた本に顔をかくしたまま、返事のかわりに、片方^{かたほう}の肩^{かた}をちよつと持ちあげた。へどうしたの？　という意味^{いみ}のしぐさだ。

とうさんは、つづけていった。

「そうなんだ！　おまえが悪いことをしたって、わたしは、お説教^{せつきょう}するだけだった。そんなことはしょっちゅうのことだが。でも、もうわかったぞ。まずひっぱたかなければならなかったんだ。」

「これからでもおそくないわよ。」

いとこのベーラ・セルゲーエブナが、自分の部屋へやから口をだした。

ジョニーは、ベーラのちよつかいには知らん顔をして、本から左目をあげ、とうさんを見た。ちよつぱり、気になってきたようだ。

「まったく、そのとおりだ。まだ、おそくはない。これから、すぐにでも実行するぞ。」
とうさんは、興奮こうふんしている。

「どうするの？」

ジョニーは、また、本にかくれながら、ぼんやりと聞いた。とうさんは、ちよつとまごついた。

「『どうするの』だって？ どうされるか、わからないのか。」

ジョニーは、肩かたをすくめた。

「だって、とうさんもいったでしょう。『いままではお説教せつきょうをただけ』だって。それなのに、ぼくにどうしてわかるのさ？」

「ふん！ 『どうする』って……。本にも書いてあるだろう。おまえは、いつも本を読んでいるんだ。とうさんと話をしてるときにだってだ。」

ジョニーは、誇らしげにいった。

「そんなつまらない本なんて、読んでないよ。」

とうさんは、かん高い声で命令した。

「本をおけ！ さもないと、いますぐに実行するぞ！」

ジョニーは、くたびれた本をおき、両ひざをかかえて、あごをのせた。それから、ゆっくり口をひらいた。

「とうさん。どうせ、とうさんにはなにもできないよ。」

「どうしてだ？」

「うん。まず、とうさんには教養があるでしょう……。それに、ぼくがかけてどこでどんなにはやいか、知らないでしょう。でも、とうさんは、体力検定も受けずに、非難されたんでしょう？　とうさんに聞いたんだよ。」

「そんなことは、おまえに関係ない。」

とうさんは、ぶすつとこたえた。

「だが、おまえを追いかけるつもりはないさ。どうせ、自分でもどつてくるんだ。」

「そりやそうだね。でも、そのときには、とうさんも冷静れいせいになっているから、ぼくがちつとも悪くなかった、つてことがわかつているよ。」

ジョニーは、しんみようにいった。

とうさんは、うでを組んで、ジョニーをまつすぐに見た。そして、とりなすように、ゆつくり口をひらいた。

「おや、悪くないっていうのかい……。」

「じゃ、ぼくがなにをしたっていうの？」

「おや？……なにをしたかつて？……自分のやったことじゃないか！……うわさを聞いたぞ！　とんでもないうわさだぞ……。だが、きょうはどうだ？　先生に向かつて、どんな口をきいたんだ？」

「『どんな』つて？」

「『先生には関係かんけいありません』なんて、よくいえたもんだ。」

「そうじゃないよ、とうさん。ぼくはね、『すみません。でも、ぼくの髪かみの毛は、ぼくの問題もんだいですから』って、いったただだよ。」



「それ、それ！ 先生にそんな口をきいてもいいと思ってるのか。」

「じゃ、どうして、先生はぼくの頭に文句をいうの？」

「文句だって。」

「うん、ケチをつけるんだ。毎日さ。」

「それは、おまえの頭があまりにもすごいからだ！ おまえは、髪かみの毛が長いほど、かつこいいと思ってるんだろう？ ところが、こうだ。はじめは髪を肩かたまでのばす。そのあと、口にたばこをくわえるようになり、そのあと、外で酒さけに手をだす……。」

ジョニーが、ことばをとってつづけた。

「そのあと、盗ぬすみ。そのあと、刑務所……。インナ先生も、そういつてたよ。」

「まったく、そのとおりだ！」

「まったく、ばかげてる！」

ジョニーは、なさけなそうにいった。

「わかつているのか、ジョニー！」

とうさんは、かつとしたが、思いなおした。息子むすこに教養きょうようのある人間だと思われてい

るのだ。ちょっと考えて、おさえた調子でたずねた。

「いいだろう。それではいつてみなさい。どうして、そんなにもじやもじやの髪をしてるのかね？」

「いいですよ。」

ジョニーも、おさえた調子でこたえた。

「春休みに子ども読書週間があるんだ。そのとき、ピオネール会館のお祭り^{まつ}で、本の主人公たちの仮装大会をやるんだ。ぼくは、『三銃士^{さんじゆうし}』のダルタニアン^{*2}になりたいのさ。坊主頭^{ぼうちうずあたま}のダルタニアンなんて、いないでしょう？」

とうさんは、あつけにとられて、あごの下をかいた。

「え、えっ？　じゃ……なぜ、インナ先生にいわなかったんだ？」

ジョニーは、ふうつとため息をついた。

「とうさん、ねえ、考えてよ。かっとなっている女の人に、説明^{せつめい}ができると思う？」

そのことばを聞いて、とうさんは、ちょっと自信^{じしん}を失^{うしな}った。あれこれ考えていると、廊下^{ろうか}でかあさんの声がした。

「あなた！　きてくださいな。」

とうさんは、まごついたようにジョニーを見てから、廊下^{ろうか}にでていった。

「あなた！　泥^{どろ}だらけのくつをきれいな玄関^{げんかん}マットの上におかないでください、って、なん回お願いしたのかしら？」

「わたしは、おかなかったよ。ただ……。」

とうさんの声は、おだやかだった。

「じゃ、わたしがあなたのくつをおいた、ってことですか？」

ジョニーは、立ちあがって、そつとドアをしめた。

両親のけんかを聞くのはよくないようだ。

ふたりの声は、ほとんど聞こえなくなった。かすかに、とぎれとぎれに聞こえるだけだ。

「でも、わたしが説明^{せつめい}しようとしているのに……。」

「説明なんてけっこうよ。でも、きれいな……。」

それから、ふたりは、台所へ行ってしまった。